

はじめに

現在の日本をどのように〈語る〉ことができるだろうか。

国土面積約 37 万平方キロメートル，人口 1 億 2777 万人，国内総生産約 500 兆円，国富 2716 兆 6304 億円(2006 年末)等々のデータで日本の「輪郭」を表すことはできる。だが，誰が，何を，何の目的で，どのようにして生産したのか，という問いに答えることはできない。この問いに答えるためには，社会を視る眼をもたねばならない。経済学が社会を特徴づけるさいに，最近では「市場経済」とすることが多い。旧ソ連，東欧諸国が〈崩壊〉する以前では，社会主義経済に対抗させるという意味でも「資本主義経済/資本制経済/資本主義システム」という用語が当たり前に使われていた。経済学の土俵で言えば，いわゆる〈近代経済学〉と〈マルクス経済学〉の対立があった。しかし社会主義システムの凋落と共に，マルクス経済学もその力を失いつつあると多くの人によって断ぜられる。

果たして，資本主義というシステムのありようを分析する意味はなくなったのだろうか。たしかにマルクス経済学がその基礎におく『資本論』第 1 部が出版されたのは 1867 年であるから，すでに刊行後 140 年余年経過している。『資本論』の分析をそのまゝの形で，21 世紀を迎えた現代社会に適用できるはずもない。だが，〈働く〉をキーワードにして現代日本を読み解こうとすれば，ただちにパート，契約，派遣といった非正規労働にかかわる諸問題が浮かび上がる。働き過ぎ，サービス残業，過労死，偽装請負，名ばかり管理職等々，働く人々が抱える苦しみを日々目の当たりにしている。人々の「合理的選択行動」の結果として，こうした苦しみを解釈できるだろうか，という疑問をもつ人も多いはずである。

本書は，あくまでも〈資本主義〉に焦点をしぼり，そのワーキングをどのように納得できるかを経済学の初学者を念頭に解説したものである。一言でいえば，「資本主義を理解する *Understanding Capitalism*」ことが目的である。大学の講義では，『社会経済学』『政治経済学』といった科目名で説明されている内容になる。かつては『資本論』をそのままなぞるような形式で講義がおこなわれていたが，本書では，そうした方法は採らずに，マルクスの思考を中心に据えつつも，さまざまな理論に学びながら，資本主義の仕組みを理解する方法を解説しようと試みている。

『社会経済学』と題されたテキストも複数出版されているが，本書は「置塩理論」

に抛りつつ叙述が進められる。『蓄積論』(第二版, 1976 年)を読むことで, 置塩理論を知ることはできるが, すでに出版から 30 年を経過しているし, 現在では入手が難しくなっている。鶴田満彦・米田康彦と共同で書かれた教科書『経済学』(大月書店, 1988 年)も, 改訂されることなく現在に至っている。そのような事情を考え, 本書は, 資本主義を理解するための〈最小サイズのモデル〉を用いて, 欧米の政治経済学の展開を踏まえながら, 置塩理論の主要部分を解説しようとしたものである。

「〈もう一つの〉経済学は可能なのか」と題されたイントロダクションに続いて, 以下で採り上げられる基本問題は,

- ・社会が〈再生産〉されるってどういうこと?
- ・〈利潤〉はどこから生まれるの?
- ・〈実質賃金〉はどのように決まるの?
- ・なぜ〈失業〉してしまうの?
- ・なぜ経済は〈変動〉するの?
- ・けっきょく〈資本主義〉システムってなんなの?

である。

解説は対話形式でおこなわれる。登場するのは, Yoshi 先生, 経済学の基礎的学習が済んでいる Kei 君, そしてこれから経済学を学び始める Emi さんである。初めて学ぶときに, 躓きがちな点を Emi さんが質問し, 可能ならば, 先輩格の Kei 君が回答し, 不足分を Yoshi 先生に補足するといった形で進行していく。学び始めた学生が, みずから Emi さんの立場におくことで, 取っつきにくいと言われる経済学へのバリアーを除こうとするチャレンジと受け止めてもらいたい。対話形式の解説を試みたのは, 通信教育部の小冊子『法政通信』(2000 年 11 月)に寄せた「ケイザイガクって, なんなの」と題した小文が最初である。そして, 本書のイントロダクションとして収めた「もう一つの経済学は可能か」は「経済学研究のしおり:経済学部学生のための学習案内」『経済志林』(2007 年 10 月)として書かれた。これに続く文章として, 書き継いでできあがったのが本書である。